

平成21年5月20日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18720199

研究課題名（和文） 軍人皇帝時代におけるローマ帝国とパルミラ

研究課題名（英文） Roman Empire and Palmyra in the Third Century A.D.

研究代表者

井上 文則（INOUE FUMINORI）

筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・講師

研究者番号：2040068

研究成果の概要：本研究では、第一に軍人皇帝時代におけるパルミラの支配者であったオダエナトゥスの経歴を復元した。第二に、パルミラ帝国を倒した皇帝アウレリアヌス（在位 270～275 年）がローマに導入した太陽神信仰とパルミラの太陽神信仰との間に深い関係があったことを指摘した。そして、第三にパルミラ史の根本史料の一つであるラテン語史書『ヒストリア・アウグスタ』に含まれるオダエナトゥスやゼノビア、ヘレンニアヌス、ティモラウスなどの当該時期のパルミラの支配者たちの伝記の翻訳及び訳注を行った。これらの作業を通して、軍人皇帝時代におけるローマ帝国とパルミラの関係についての知見を深めた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	150,000	1,850,000

研究分野：史学

科研費の分科・細目：西洋史・西洋古代史

キーワード：ローマ帝国、パルミラ、軍人皇帝時代

## 1. 研究開始当初の背景

パルミラは、シリア砂漠の中にあるローマ帝国の一都市であったが、3世紀の軍人皇帝時代には、その指導者オダエナトゥス、オダエナトゥスの死後はその妻であったゼノビアの下、ローマ帝国の東方諸属州をその支配下に収め、大きな政治的影響力を振るったことが知られている。しかしながら、わが国では、パルミラの研究は、この都市がシルクロード上の隊商都市としての一面をもっていたため、もっぱら東西交渉史の研究テーマとして取り上げられてきた。代表的な研究とし

ては、小玉新次郎氏の『隊商都市パルミラの研究』同朋社、1994年を挙げることができる。また近年では（財）シルクロード学術センターや奈良大学などがパルミラ遺跡の発掘（パルミラ遺跡の南東墓地）を行っている。一方で、欧米においては、パルミラは、東西交渉史の立場からはもちろんのこと、ローマ史研究の観点からも、古くから研究がなされてきており、その蓄積は膨大なものがある。近年においても、本研究テーマと直接的に関係のある、Udo Hartmann の *Das palmyrenische Teilreich*, Stuttgart, 2001 や M. Sartre, *The*

Middle East under Rome , translated by Catherine Porter and Elizabeth Rawlings with Jeannine Routier-Pucci, Cambridge, Mass., 2007、さらには Peter M. Edwell の Between Rome and Persia; The Middle Euphrates Mesopotamia and Palmyra under Roman Control, London and New York, 2008 などが刊行され、軍人皇帝時代におけるパルミラとローマ帝国の関係についても活発な研究が続けられている。本研究は、このような研究の現状を見、パルミラを、東西交渉史の観点からではなく、ローマ帝国史の一齣として、研究することを目指した。

## 2. 研究の目的

繰り返しになるが、本研究では、上述の「研究開始当初の背景」を踏まえ、わが国で専らなされてきたような東西交渉史の観点からではなく、ローマ史のコンテキストでパルミラを研究することを第一の目的とした。このような立場からの研究、特にローマ史研究者によるそれは、わが国ではこれまでなされたことがなかったからである。そして、この研究を通して、最終的には、軍人皇帝時代におけるパルミラとローマ帝国の関係についての新たな視座を提供し、本研究が今後のパルミラ・ローマ関係史研究の一つの基礎となるように努めた。具体的に、この目的を果たすために、パルミラ史の根本史料の翻訳を試みつつ、パルミラの支配者オダエナトゥスの経歴をローマ帝国との関係の中で復元し、またパルミラを倒したアウレリアヌス帝の宗教とパルミラの宗教との関連を問うなどの研究を行った（研究開始当初は、パルミラによる東方諸属州の支配の実態を考察課題としていたが、研究の進展の結果、必ずしもこの課題に沿わない面もあったことを断っておきたい）。なお、本研究の副産物として、『ヒストリア・アウグスタ』と称されるラテン語史書（パルミラの支配者たちの伝記を含む）そのものの研究も併せて行った。『ヒストリア・アウグスタ』は、4世紀の末に著されたと考えられている史書であるが、その成立年代や著者、あるいは執筆意図については謎が多く、またそのため史料としての価値についても検討の余地が大きく、軍人皇帝時代の根本史料であるにもかかわらず、未解決な問題が多くあったからである。

## 3. 研究の方法

(1)「研究開始当初の背景」で述べたように、パルミラの研究は、欧米では膨大な蓄積がある。したがって、まずは、欧米のパルミラ史研究の成果を、関連文献の収拾、精読を通じて、把握することに努めた。主に、英語、フランス語、ドイツ語の文献がその対象となった。

(2)次に、パルミラ史の根本史料であるギリシア語やラテン語で書かれた歴史書、そしてギリシア語とパルミラ語の碑文史料を収集し、これらを精読した。特に、ラテン語史料の『ヒストリア・アウグスタ』については、翻訳、訳注という作業を通して、徹底的なアプローチを試みた。本研究では、(1)、(2)に見られるように、基本的には文献学的アプローチを行った。

(3)上述のように、本研究は、基本的には、文献学的アプローチをその研究方法としたが、一方で、科学研究費取得一年目には、パルミラ現地、さらにはパルミラと深い関係を有したユーフラテス川に臨む城塞都市ドゥラ・エウロポスへも赴き、これらの遺跡の地勢や現状を観察することで、研究が文献学的研究が陥りがちな机上の空論にならないようにも配慮した。なお、パリのルーブル美術館に所蔵されているパルミラやドゥラ遺跡の出土品についても調査を行った。

## 4. 研究成果

(1)オダエナトゥスの経歴の復元。パルミラの支配者であったオダエナトゥスは、軍人皇帝時代において、ギリシア語で *ho lamprotatos hypatikos* と呼ばれる官職とパルミラ語で *mtqnn' dy mdhn' klh* と呼ばれる官職に就いていたことが知られているが、これらがローマ帝国のいかなる官職に当たるのかが不明であったため、諸史料の比較考察を通して、これを解明した。結論的には、前者のギリシア語官職は、パルミラの属した属州シリア・フォエニキアの総督職であったこと、後者のパルミラ語の官職は、ローマの正式な官職ではなく、パルミラ人が自称した称号に過ぎないことが分かった。その上で、オダエナトゥスの経歴復元のためには、ビザンツ時代のギリシア語史料ゾナラスを利用しなければならぬことを指摘し、この史料に基づきながら、オダエナトゥスの経歴を以下のように復元した。まず、オダエナトゥスは、アウレリアヌス帝の治下 (253~260年) に同皇帝によりシリア・フォエニキア属州総督に任じられ、同皇帝がペルシアの捕虜になった後、息子のガリエヌス帝により、東方 (=シリアとメソポタミア) の軍司令官に任命された。さらに、この地位にあった時に、東方で篡奪を行っていたクィエトゥス帝を倒すという軍功のゆえに、オダエナトゥスは、さらに全東方 (=黒海からアカバ湾に至るまでのローマ国境駐屯軍) の軍司令官になっていたことを解明したのである。こうして、オダエナトゥスの経歴をローマ帝国の制度の枠内で理解し、かつ同時に、当該時期におけるローマ帝国の軍事政策の一端を解明した。時の

ローマ皇帝たちは、伝統的に元老院議員に与えられてきた重要な軍事上のポストを、元老院議員という身分に関わらず、有能な人間に委ねるという処置をとっていたのであった。これは、当時、生じつつあったローマ帝国全体の支配者層の変容と軌を一にする出来事であったのである。オダエナトゥスの経歴からは、想像されている以上に、パルミラとローマとの深い関係が読み取れた。この研究成果は、史学研究会の『史林』に2007年に発表した。

(2) アウレリアヌスの太陽神とパルミラの太陽神の関係性を指摘。アウレリアヌス帝は、軍人皇帝の一人で(在位270~275年)、当時パルミラとガリアによって三分割されていたローマ帝国を再統一したのであるが、通説によれば、パルミラを打倒した際、アウレリアヌスはシリアのエメサ市で崇拝されていた太陽神を自らの戦勝に加護を与えたとしてローマに持ち帰り、巨大な神殿を建てて祀ったとされている。そして、このアウレリアヌスの行為は、キリスト教の国家宗教化の前段階として重要な歴史的な位置付けを先行研究によって与えられてきた。しかし、アウレリアヌスの太陽神とエメサの太陽神とを結びつけるのは、史料価値の疑わしい『ヒストリア・アウグスタ』だけであり、両者の関係性については、疑念が残る。また、より信憑性の高いビザンツ時代のゾナラスの史書によれば、アウレリアヌスは「ペロスとヘリオス(=ベール神と太陽神)」をパルミラ戦勝の後、問題の神殿に祀ったと伝えられており、アウレリアヌスの太陽神がエメサの太陽神ではなかったことを示唆している。考察の結果、アウレリアヌスの太陽神は、実は、パルミラで主神の位置を占めていたベール三位一体神の一人である太陽神ヤルヒボルであると考えに至った。アウレリアヌスは、パルミラ戦勝の記念として、パルミラの主神をローマにもたらし、それを祀ることで、自らの偉大な功業を歴史に永続的に残そうとしたのである。したがって、アウレリアヌスの行為にキリスト教導入の先駆的な姿を認めることは出来ないのである。この研究で得ることの出来た結論も、ローマ帝国とパルミラが、従来考えられてきた以上に、深い関係を有していたことを示している。この研究結果は、京都大学で行われた古代史研究会の場で、2009年に報告を行った。

(3) 『ヒストリア・アウグスタ Hl storia Augusta』の翻訳・訳注。『ヒストリア・アウグスタ』は、4世紀の末に書かれたと考えら

れているラテン語のローマ皇帝の伝記集である。この伝記集には、2世紀のハドリアヌス帝から3世紀末に即位したディオクレティアヌス帝の直前の皇帝ヌメリアヌスまでの諸皇帝の伝記が含まれている。つまり、本研究が対象とする3世紀の軍人皇帝時代の皇帝たちの伝記が網羅されているのである。中でも特に本研究と関係が深いのは、パルミラが独立化の道を歩み始めた時の皇帝であるウァレリアヌス帝(在位253~260年)とガリエヌス帝(在位253~268年)の二人の皇帝の伝記である。より具体的には、『二人のウァレリアヌスの生涯』、『二人のガリエヌスの生涯』、そして『三〇人の僭称帝たちの生涯』と題した諸巻がそれに当たる。さらに、『三〇人の僭称帝たちの生涯』には、このパルミラの支配者であったオダエナトゥス、そしてその死後に影響力を振るった史上に名高い女王ゼノビア、さらにはオダエナトゥスとゼノビアの間にできた二人の息子ヘレンニアヌスとティモラウスの伝記が含まれている。本研究では、これらの皇帝たちの伝記を翻訳し、同時に関係史料との突合せの結果を、訳注の形で施し、『ヒストリア・アウグスタ』の史料価値にも深く踏み込むことが出来た。ただし、結果的には、『ヒストリア・アウグスタ』の史料価値をいっそう疑うことになったのではあるが。なお、繰り返すまでもなく、パルミラ史に関する文献史料で残存しているものは極めて少なく、『ヒストリア・アウグスタ』は、その貴重な一部であることには変わりないことは申し添えておかねばならないであろう。本研究の成果として、これらの伝記を『ローマ皇帝群像3』として2009年に京都大学学術出版会から刊行し、単なる研究のための研究にとどまらず、一般の人々の利用にも資するようにした。『ヒストリア・アウグスタ』には、この他にもゼノビアを倒したアウレリアヌス帝(在位270~275年)の伝記も含まれているが、今回はこの伝記までは十分に手が回らなかったため、これについては、『ローマ皇帝群像』の続刊で公にしていきたいと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

① 井上文則、「パルミラの支配者オダエナトゥスの経歴」『史林』第90巻5号、71~83頁、2007年、査読有り。

〔学会発表〕(計2件)

① 井上文則「イリュリア人皇帝時代(268~285年)のローマ帝国」西洋史研究会大会(於青山学院大学)、2007年11月24日。

②井上文則「アウレリアヌス帝の太陽神崇拝について」古代史研究会大会（於京都大学）、2009年3月5日。

〔図書〕（計1件）

①アエリウス・スパルティアヌス他著、井上文則、桑山由文訳『ローマ皇帝群像3』、京都大学学術出版会、2009年、355頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

井上 文則 (INOUE FUMINORI)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・講師

研究者番号：20400608